

大和政権成立への一考察：古墳の初現に関連して

小島, 俊次 / KOJIMA, Shunji

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

20

(開始ページ / Start Page)

64

(終了ページ / End Page)

78

(発行年 / Year)

1968-03-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00011739>

大和政権成立への一考察

—古墳の初現に關連して—

小島 俊 次

はじめに

大和政権の成立、あるいはその政権授受ともいふべきものについては、古代史研究の諸先輩によつて、最初が崇神・垂仁・景行の三天皇による王朝（第一次）、つぎが応神・仁徳・履中・反正・允恭・安康・雄略などの天皇による王朝（第二次）、第三次が継体天皇にはじまる王朝というように考察され、また、そのいずれの王朝も、在地豪族との結合により、政権を確立したという考察がなされている。⁽¹⁾

とくに第三次の継体天皇においては、前二次の王朝の地盤ともいふべき大和・河内の、大和川流域地域への進出まで、大和・河内・山背・摂津の四国分界点付近、淀川・木津川流域、河内の樟葉、山背の筒城・弟国と遍歴、近江・尾張地方の勢力を背景に、大和の在地豪族と対立、葛城系に属する第二王朝の仁賢天皇と、和珥系の春日大娘女皇女との間に生れた娘、手白香皇女を皇后と

して、大和の磐余玉穗宮に入るの⁽⁶⁾である。すなわち、武力を示すも、武力による進攻でなく、政略結婚——和陸によつて、政権を確立したのである。しかし、継体天皇の崩じた後の奥津城は、手白香皇女の畝田陵のように、磐余玉穗宮には遠くなく、また和珥氏本貫地にも近い天理市中山町に求められるように營造された⁽⁷⁾のではなく、摂津の三島藍野に營造されている。これは、継体天皇が磐余玉穗宮に入つて、わずか五年で崩じたため、第一・第二次王朝の地盤に、自己の地盤——本貫地といふべきものを設けえず、大和・河内への進攻時に設けた河内の樟葉の進攻基地に近い、摂津の三島藍野に営んだとも考えられるのであり、また、その摂津は、淀川をはさんで河内と対立する地域であり、河内⇓大和への進攻に際しては、勢力温存に適しているともいえる地域である。

第二次王朝の始祖、応神天皇は、新羅から帰還した神功皇后が、筑紫の宇瀬¹⁰で皇子を分娩、皇后と皇子は難波に帰つてくるといふ、出生説話のごとく、北九州の生まれであり、大和政権を篡奪

するに際しては、第一次王朝の品陀真若上の娘、仲姫を皇后として(11)おり、在地豪族と外来豪族との和合、あるいは隸属を考へさせられるのである。また、難波への帰還——進攻に際しては、摂津の務古水門に入るなどのもたつきがあり、このことから、淀川右岸における基地ともいふべきものが考へさせらるのである。しかしこの応神天皇の奥津城たる古墳は、第二次王朝の一基地に近い河内の誉田、恵我藻伏岡に、当時畿内に盛行する前方後円墳の雄大なものを、天皇の威風を示すがごとく営み、またその子、仁徳天皇は、自分の陵を、父応神天皇の陵に凌駕するも劣らない雄大な前方後円墳を、和泉百舌鳥耳原の地に設けて、その権力を示していることは、継体天皇の在地豪族との和合程度の差であるかも知れない。(16)

だが、応神・仁徳両天皇陵の所在地、あるいは履中・反正・允恭とつづく第二王朝の陵が百舌鳥と誉田地方に所在し、また仁徳天皇の皇后、磐之媛命陵が、奈良盆地北辺、佐紀丘陵の平城坂上に営まれている。(17)そして、その営造地の周辺には、陵墓葬送関係の氏族といわれる土師氏本流四腹の本貫地があつて、(18)応神天皇陵をはじめとする陵墓を営造したと思われるのである。またその土師氏本流四腹の一腹、のちに菅原氏と改氏姓した一支族(19)は第二次王朝に葛城氏よりも多い后妃を出している和珥氏の勢力範囲ともいふべきところに居住しており、さらに応神天皇・磐之媛命・仁徳天皇の御陵と治定されている前方後円墳において、その築造企画の同一性がみられるとともに、その崩年の順序の如く、端的な変遷が考えられるのである。

大和政権成立への一考察(小島)

(20)すなわち、上田宏範氏の算出数値によると、(20)応神天皇陵と磐之媛命陵とは、6・1・3で、仁徳天皇陵は、(20)応神天皇陵の基本設計の中央で上下に切離し、その1の部分で二単位分だけ延したと推される6・3・3であつて、このような変化は、磐之媛命陵の所在する佐紀古墳群において、それも隣接するコナベ古墳とウワナベ古墳との間においても求められ、よつて、同一指導者か、同一氏族による築造の企画性がうかがえるのである。また、その営造の序列については、(20)応神天皇・磐之媛命の両陵は二重の周濠を有し、仁徳天皇陵において三重になるといふ遷異があつて、端的な変遷案が可能となるのである。

このように私考を進めると、第二次王朝においては、土師氏本流四腹のうちの何腹かによる墳墓営造の可能性が大きく浮び上るのであるが、これは第二次王朝が、陵墓葬送の氏族ともいふべきものにといたるまで、在地豪族との融和が早くあつたと考えられるのであるが、いづれにしても、それは第二次王朝のみでなく、(20)継体天皇においても、摂津を勢力下におき、大和・河内への進攻・和睦が考えられるのである。

しからば、第一次の崇神天皇にはじまる王朝の成立ということになるが、この王朝に対して、北方系の騎馬民族による征服王朝とする見解(21)については、直ちに賛辞を与えることはできないが、崇神天皇が来臨し、神武天皇の東征説話からも考へさせられる磯城地方の有力な豪族を統属下に入れるとともに、三輪山の祭祀権を掌握して、はじめて畿内を中心とする政権を確立したという考察(22)は不可能でなく、それが三輪山をとりまく地域に、磯城瑞籬宮

(崇神)・巻向珠城宮(垂仁)・纏向日代宮(景行)が存在したとする伝承と、これらの宮の北方に崇神天皇陵、景行天皇陵とみなされている前方後円墳が存在することからも考えられている⁽²⁵⁾。

だが、この第一次王朝に關係する説話の多くは、三輪祭祀権掌握の葛藤であつて、崇神天皇と在地豪族、三輪君らの祖先との和睦、あるいは統属下におさめるかの問題であつて、崇神天皇の來臨ともいべきものの経路は、神武天皇と崇神天皇とを重ね、同一人として、神武説話を崇神天皇にあてはめなければ、第二次王朝や、第三次王朝のような解決はなしえないのであるが、崇神天皇・景行天皇陵など、三輪山をとりまく地域の古墳を綜覧するとき、そこに、この崇神天皇來臨経路の一端が浮び上るのではないかと思われるのである。

しかしながら、この三輪山周辺の古墳において、崇神天皇が実在し、その在位年代を、二七〇〜二九〇年ごろと推定の上になつた場合においては、現在、その時期と推定できる古墳はなく、ここで考察する事項が消滅してしまふし、また、古墳文化の普及伝播と大和政権成立・勢力の拡大との關係をも消滅してしまふのであるが、第一次王朝は、第二次王朝成立以前の四世紀の中頃までということにおいて、つぎに、幸にして遺存し、幸にして知りえた古墳から、崇神天皇來臨経路の一端となるべきものの考察をなしてみようと思ふ。

註

(1) 井上光貞「神話から歴史へ」(日本の歴史1)昭和四〇年、上田正昭「大和朝廷」昭和四二年、石田英一郎編「シンボ

ジウム日本国家の起源」昭和四二年等。

(2) 『日本書紀』継体天皇元年春正月の条。「甲申天皇行_二至樟葉宮_一」

(3) 『日本書紀』継体天皇五年冬十月の条。「遷_二都山背筒城_一」

(4) 『日本書紀』継体天皇十二年春三月の条。「甲子、遷_二都第_一」

(5) 『日本書紀』継体天皇元年三月の条に「(略)……宜備_二礼儀_一奉_レ迎_二手_一白香皇女、甲子、立_二皇_一后手白香皇女、脩_二教于内_一……(略)」とあるが、以下の記載でもみられるごとく、既に尾張連出の目子媛、三尾角折君の妹、雅子媛を娶、二兄(安閑・宣化)があることが知られ、手白香皇女を迎えるのは相当遅いとみられる。

(6) 『日本書紀』継体天皇廿年秋九月の条。「乙酉、遷_二都磐余玉穗_一」

(7) 畷田陵については、記紀に記載なし、諸陵式に畷田墓としてみられる。

(8) 『日本書紀』継体天皇廿五年冬十二月の条。「庚子、葬_二于畷野陵_一」

(9) 『日本書紀』継体天皇廿五年春二月の条。「丁未、天皇崩_二于磐余玉穗宮_一」

(10) 『日本書紀』神功皇后摂政前紀十二月の条の「辛亥、生_二蒼田天皇於_レ資紫_一、故時人号_二其皇_一曰_二三宇彥_一也_一」や、神功皇后摂政元年の条、古事記中巻にみられる。

(11) 『日本書紀』応神天皇二年春三月の条。「壬子、立_二仲姫_一」

- 為_二皇后_一、」
- (12) 『日本書紀』神功皇后摂政元年二月の条「(略)……皇后之船直指_二難波_一、于時皇后之船廻_二於海中_一以不能_レ進、更還_二務古水門_一而卜之、……(略)」
- (13) 現在の淀川下流地帯の右岸を指しているのであって、神崎川から西、現在の神戸港あたりまでを指す。
- (14) 諸陵式に「惠我漢伏岡陵在_二河内国志紀郡_一、」
- (15) 『日本書紀』仁德天皇六十七年十月の条、「甲申、幸_二河内国石津原_一、以定_二陵地_一、丁酉、治築_レ陵、……(略)……故号_二其処_一、曰_二百舌鳥耳原_一者其是_レ之縁也、」
- (16) 雄大な陵墓營造地を荒野に求めたために、摂津の不毛の地に營んだかも知れない。これは仁德帝陵からも考えられる。
- (17) 『日本書紀』仁德天皇卅七年十一月の条、「乙酉、葬_二皇太后於那羅山_一、」・諸陵式には「平城坂上墓壑之媛命在_二大和国添上郡_一」
- (18) 拙稿「土師四腹と古墳」(『末永先生古稀記念古代学論叢』所収)昭和四二年
- (19) 岸 俊男「ワニ氏に関する基礎的考察」(『律令国家の基礎構造』所収)昭和三五年
- (20) 上田宏範「前方後円墳における築造企画の展開」(『近畿古文化論叢』所収)昭和三七年・以下の数値はこれによる。
- (21) 江上波夫ほか『日本民族の起源』昭和三三年
大和政権成立への一考察(小島)
- (22) 『日本書紀』崇神天皇三年の条、「九月、遷_二都於磯城_一、是謂_二瑞籬宮_一、」
- (23) 『日本書紀』垂仁天皇二年の条「十月、更都_二於纏向_一、是謂_二珠城宮_一也、」
- (24) 『日本書紀』景行天皇四年十一月の条「乘輿自_二美濃_一遷、則更都_二於纏向_一、是謂_二日代宮_一、」
- (25) 『日本書紀』垂仁天皇元年十月の条、「癸丑、葬_二御間城天皇於山辺道上陵_一、」・『古事記』には「御陵在_二山辺道勾之岡上_一也」
- (26) 『日本書紀』成務天皇二年十一年の条、「壬午、葬_二大足彦天皇於倭国之山辺道上陵_一、」
- (27) 前註 1

一 第一次王朝周辺の古墳

第一次王朝の本拠地ともいうべき三輪山をとりまく地域には、三輪山の西北方、崇神・景行両天皇陵を中心とする柳本古墳群と呼ばれているものがあり、さらにその北方には、手白香皇女の倉田陵に治定されている前方後円墳を含む大和古墳群と呼んでいるものがある。また三輪山の南方には、三輪山と初瀬川をはさんで対峙する鳥見山の山麓を中心として、茶臼山・メスリ山などの古墳群がある。

これらの古墳群は、はじめにも記した磐之媛命陵・ウワナベ・コナベなどの前方後円墳の所在する佐紀古墳群や、柳本・大和古墳群と相對する奈良盆地西辺の南山・佐味田宝塚・乙女山・

巢山などの古墳が所在する馬見古墳群、あるいは、この馬見古墳群と鳥見山籠古墳群とを結ぶ線のある古墳群よりも古く、また、その柳本古墳群においても、崇神天皇陵は、前方後円墳において、初現的な姿を示すものとされている。

しかし、これらの古いという推定は、すべての古墳を詳細に発

掘調査が実施され、その結果によつてのものでなく、とくに崇神天皇陵においては、その築造の立地と、外形によつての結果にすぎないのである。よつて、この柳本・鳥見山籠の古墳年代を推定するに、最も適当と思われる前方後円墳の主なものを表記してみると、別表のとおりである。

三輪 王朝 周辺 主要 前方 後 円 墳 (含双方中円墳・除横穴式石室墳)

群名	墳 名	立 地	方 位	規 模	主 要 出 土 遺 物	備 考
	茅原大墓古墳	台地上	北面	周濠、全長六六米、後円部の径約五五米、帆立貝式	埴輪(円・家?)	大三輪町史
	箸大墓古墳 (倭迹迹日百襲 姫命大石墓)	台地端 縁	南西 南面	周濠?、全長約二七五米、前方部幅一二五米、高約一七・四米、後円部径一五〇米、高約二六米	埴輪(円・家?)	日本の古墳
	勝山古墳	平地	東北 東面	周濠		大三輪町史
	柳本大塚古墳	台地端 縁	南東 南面	周濠?、全長約九五米、前方部幅約四〇米、後円部径約五〇米、堅穴式石室・小石室(副室)	内行花文鏡・銅鏃	奈良県史跡報告第六回等
	石名塚古墳	〃	南面	周濠、全長約七五米、前方部幅約二五米、後円部径約四五米	埴輪	天理市史資料 編
	ノベラ古墳	平地	〃	(全長約七〇米、前方部幅約三〇米、後円部径約四五米)		消失
	黒塚古墳	台地端 縁	西面	周濠、全長約一三〇米、前方部幅六〇米、高約七米、後円部径七五米、高約一三米、堅穴式石室?		奈良県

柳		本		古		墳		群																																								
シウロ塚古墳	尾根上	西面	全長約八〇米、前方部幅約三五米、後円部径約五〇米	景行天皇陵	〃	西南	周濠、全長約三一〇米、前方部幅約一七〇米、高約二・七米、後円部径約一六五米、高約二・三米	上山古墳(景行陪塚)	尾根端	南面	全長約八五米、前方部幅約三五米、後円部径約五〇米	安下山古墳(崇神陪塚)	台地上	南西	全長一二二米、前方部幅六五米、高約八米、後円部径約七五米、高約二米	崇神天皇陵	尾根端	西北	周濠、全長約一五〇米、前方部幅約六〇米、高約九米、中円部径約九〇米、高約一六米、後方部幅約七五米、高約一米、堅穴式石室、長持形石棺	榑山古墳	尾根上	西北	現九六米、高現一四・六米、後円部径現一六〇米、高現二三米	崇神天皇陵	尾根端	西北	周濠、全長現在二四〇米、前方部幅現九六米、高現一四・六米、後円部径現一六〇米、高現二三米	天神山古墳	〃	南面	全長一一三米、前方部幅約五〇米、高約四米、後円部径約五五米、高約七米、堅穴式石室・木櫃	南アノ山古墳(崇神陪塚)	〃	東面	全長約六五米、前方部幅約三四米、高約七米、後円部径約四〇米、高約九米	鏡三三面、朱約四〇キロ、直刀、刀、斧、鉄鏃、鉄鎌、鉈、劍、短冊形鉄	銅板	墳輪(円・家)、鉄鏃、石劍、車輪石・石製模造品、土製品(銅形)、位牌形石製品	埴輪	日本古墳	日本古墳	日本古墳	奈良県史跡報告第二二冊	奈良県史跡報告第二二冊	奈良県史跡報告第一九冊	?天理市史資料編	天理市史資料編	天理市史資料編

鳥見山麓古墳群

茶白山古墳	尾根端	南面	周濠?、全長約二〇七米、前方部幅約六一米、高約一三米、後円部径約一一〇米、高約二二米、竪穴式石室・木棺	石杖、鉄杖、玉類、玉葉、五輪塔形石製品、帆形石製品、鐵形石片、石銅片、銅鏃、劍、土師器、鏡片(一面前後) 墳輪(壺)	奈良県史跡報告第一九冊
兜塚	々	西面	竪穴石室・家形石棺	墳輪(円)、鉄鏃、小玉、管玉、喪玉、桜井町史空玉・鏡板、杏葉	
メスリ山古墳	丘陵上(端)	西面	全長約二三〇米、前方部幅約八〇米、高九米、後円部径約一二〇米、高二一米、竪穴式石室・副室(竪穴式石室)	墳輪(円)、勾玉、管玉、石劍、鐵型石、弓筈、竪櫛状石製品片、鏡片(内行花文、神獸鏡)、椅子形石製品片	

この表には、横穴式石室を有し、明らかに後期に属する珠城山古墳などを除いているのであるが、この表から、特に重要と思われるものを、再度つぎに瞥見してみると、

(1) 景行天皇陵

柳本古墳群中、最も雄大な前方後円墳で、

西南西にむかつてのびてきた低い尾根端に、尾根の方向と同一に営まれたものである。内部構造や、その出土遺物については詳らかでないが、築造企画の数値は6・2・2を示している。また、この古墳には陪塚か、あるいは付随して営まれた古墳がある。その一つは、前方部の北方にある南面の前方後円墳、上山古墳であり、他には、後円部の東北に円形の丸山古墳、東方に方形の赤坂古墳、さらにその東方に、西面の前方後円墳、シウロウ(ジヨ山)古墳が、同一尾根上に所在している。

前方部の前方には、ハカンド・岩神・茶白山・大塚などの古墳

があり、その大塚古墳は、南東南面に営まれた前方後円墳で、後円部中央の石室の東北にあった小石室から、径約四〇センチの「長宣子孫」銘のある内行花文鏡が出土している⁽²⁸⁾。また、景行天皇陵の南方の尾根、玉ノ山には、前方後円墳が三基縦列し、東と西の古墳には、横穴式石室が確認されている⁽²⁹⁾。しかし中央の古墳は、粘土椀などの古式に属するものであるかも知れない。

(2) 箸墓古墳

景行天皇陵の西南方、倭迹迹日百襲媛命陵に治定されている西北西面の前方後円墳で、景行天皇陵につぐ雄大なものである上、同陵と同じ築造企画の数値を示し、陪塚と考えられる古墳が数基ある。

墳丘には厚く石が葺かれ、墳輪の樹立を示す破片の出土もあり、また、後円部頂上には特種な施設がなされているようであ

る。

(3) 崇神天皇陵

景行天皇陵の北方、西北西にむかつてのびてきた尾根端に営まれた前方後円墳で、尾根方向と同一方位を示した丘尾切断の代表形である。この墳丘は、傾斜の強い丘陵を利用しているため、水濠に堤を築いて貯水の水位を変えている。⁽³⁰⁾

現在の外堤等は、元治九年から着工された補修工事により、前方部前面の堤は約二層、前方部南側面の堤は約一層高くするとともに、前方部南西端から外堤までの水位調節堤を除去し、また現在もある南側面くびれ部の堤から東、後円部には、上幅約二四層深さ約二層の堀がつくられている。⁽³¹⁾この補修工事の一部は、地形に案じ、古制に復する方針ということであるが、柳本藩当局が、堀の容水量の増加を考えたものであるため、もとの墳丘は、前方部では、現在の最高水位より一層以上、下げて考える必要があるとともに、墳丘裾部は、その後の濠水による自然崩壊を考えて、主軸全長二六〇層以上（現約二四〇層）、前方部幅一一八層以上（現約九六層）の規模を有していたと考えなければならぬものである。

内部構造については詳らかでなく、したがって副葬品についても判明しないが、補修工事中、濠から内行花文鏡と同一といつてもよい文様が中央にある銅板が出土しており、⁽³²⁾また滑石製の形の小さい鍬形石が出土したという伝えがある。

この古墳にも陪塚、あるいは付随して営まれたとみられる前方後円墳や円墳などがある。前方後円墳では、前方部前面に、南面して営まれたアンド山古墳と、東面して営まれた南アンド山古墳

があり、西南方には、南面した後述の天神山古墳がある。後円部東方には、景行天皇陵東方のシウロウ塚古墳と同じように、後述の双方中円墳、櫛山古墳がある。

その陪塚、あるいは付随して営まれた前方後円墳のうち、天神山古墳を除いては、崇神天皇陵と同じ6・1.5・1.5の築造企画数値を示している。⁽³³⁾

(4) 天神山古墳

壘本古墳群中、最も詳らかになった古墳で後円部頂部に、主軸にそった長さ六・一層、幅約一・三層、高さ約一・二層の堅穴式石室を有している。この石室は、他の多くの古墳でみられるものと異なった横断面が合掌形となり、別に大きな天井石は使用されておられないものであり、石室の中央にあった現長二・六層、幅〇・七六層の木櫃状のものの内面中央に、一層×〇・五層の枠を設け、その中に朱を約四〇^キおき、朱の周辺に背を下にした鏡二〇面を配していたことから、遺骸の埋葬は考慮できなくなり、その上、崇神天皇陵の陪塚に治定されているアンド山・南アンド山の西古墳と同じく、段築成されていないことなどから、天神山古墳も陪塚と考えられ、また副葬品の組合せから四世紀後半の半を前後するものと考察できるものである。しかし、この古墳の築造企画の数値は、アンド山・南アンド山両古墳と異なり、景行天皇陵と同じ6・2・2の数値を示している。そのため、柳本古墳群の営造時期推定の、最も価値の高い資料ということのできるものとなっている。

(5) 櫛山古墳

崇神天皇陵の東側、同一尾根に、尾根を切断して営まれた双方中円墳で、前方部は破壊されて詳らかに知るす

べもないが、中円部には、組合式長持形石棺を有する堅穴式石室が破壊されたながらも残り、後円部には、祭壇を思わせるように、一定の区域を限って美しい白礫を敷き詰めたところがあつて、双方中円墳の性格の一端を示しているとともに、四世紀末から五世紀初頭の营造を思わせている。⁽³⁵⁾

また、後円部を除いた前方後円墳として、築造企画の数値をみると、6・2・2となり、築造企画上は、箸大墓古墳・景行天皇陵・天神山古墳と、同一性をもっているといえる。

(6) 茶臼山古墳

鳥見山の北麓、丘尾を切断、修整して営まれた前方後円墳で、後円部は三輪山の方に配している。その後円部に、底に六椀前後の穿孔のある壺(埴輪)を長方形に配列しその内側の堅穴式石室上を被覆すべき封土を一段と高くし、この高くした四面を割石をもつて葺いた方形格を形成している。石室は主軸に沿った長さ六・七五呎、幅約一・一三呎、高さ約一・六呎で、二枚ごとに朱で染めた割石を小口積にし、天井は表裏に朱を塗抹した板状巨石で覆い、底部はU字状になるよう割石を凹状に敷き、その上に巨木でつくられた木棺を安置していた。木棺を安置した堅穴式石室の、最も整備されたものといえるものである。⁽³⁶⁾

(7) メスリ山古墳

鳥見山麓古墳群と呼ぶよりも、阿部丘陵古墳群と呼ぶ方が適當であるが、柳本古墳群に箸大墓古墳などを加えたものと同よう、広範囲にみた古墳群をとりあげた関係上、

鳥見山麓古墳群の古墳としてとりあげた古墳で、前記茶臼山古墳よりも雄大な前方後円墳であるばかりでなく、また後円部上より見わたせる主要範囲は、茶臼山古墳が初瀬川を越した三輪山およびその麓の奈良盆地であるのに対し、メスリ山古墳は、耳成山方面の奈良盆地であるという点に相違点がある。この相違点は、単に立地ばかりでなく、内部構造においても認められるのである。すなわち、前方部に比して、非常に高く築かれた後円部中央の、墳丘主軸と直交する堅穴式石室は、多くの堅穴式石室を有する古墳でみられるように、墳丘を設けた後、墓拡というべきものを掘り下げ、その中に石室を設けたというのではなく、墳丘を積み上げて行く過程に、石畳状のもので長方形の墓域的なところを設けたといえるとともに、石室上面を方形格のように上へ、長方形に突出させるものと反対に、石室に近くなる一区画を設け、その周囲を長方形に二列、埴輪円筒を圍繞させ、さらにその二列内にも埴輪を配したという特殊構造をなしている。

さらに、その中央の、長さ約八・二呎、幅約一・三呎、高さ約一・六呎で、底部はU字形をなす粘土床からなる堅穴式石室の東側、二列の埴輪列内には、前記天神山古墳の石室と同じ、横断面が合掌形となる長さ約六呎、幅約〇・七呎、高さ約〇・七呎の堅穴式石室(副室)を、中央の石室と平行して設け、多量の武器と工具類、玉杖などを納め、遺骸埋葬は認められないものがあった。⁽³⁷⁾

以上のように、柳本・鳥見山南古墳群の重要な古墳を管見したのであるが、これら古墳が、如何なる時期のものであるか、天神山

・櫛山・茶臼山・メスリ山の四古墳の発掘調査から、他の未発掘調査の古墳營造時期を推定するのは、危険なことであるが、天神山古墳と櫛山古墳との中間の営まれた崇神天皇陵の推定時期を、何辺におくか、また茶臼山古墳・メスリ山古墳の營造時期をどこにおくかが、古墳の初現の問題で考えなければならぬことである。よって、次章に、その推定をなしてみようと思う。

註

(28) 佐藤小吉「磯城郡柳本字大塚所在大塚発掘古鏡」(奈良県史蹟勝地調査報告六)大正八年、梅原末治・森本六爾「大和磯城郡柳本大塚古墳調査報告」(考古学雑誌一三の八)大正一二年

(29) 伊達宗泰・拙稿『珠城山古墳』昭和三十一年、伊達宗泰「大和輪町穴師珠城山二号・三号墳」(奈良県文化財調査報告三)昭和三五年

(30) 末永雅雄「日本の古墳」昭和三十六年

(31) 秋永政孝「崇神天皇御陵改修工事関係の資料」(『大和天神山古墳』所収)昭和三八年

(32) 樋口清之「崇神天皇陵発見と伝ふる青銅板」(考古学研究二の一)昭和三年

(33) 上田宏範氏の教示による。

(34) 伊達宗泰・森浩一・拙稿『大和天神山古墳』(奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告二二)昭和三八年

(35) 上田宏範「櫛山古墳」(『桜井茶臼山古墳』所収)昭和三十六年

大和政権成立への一考察(小島)

(36) 上田宏範・中村春寿「桜井茶臼山古墳」(奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告一九)昭和三十六年

(37) 拙稿『奈良県の考古学』昭和四〇年

一 主要古墳營造の推定時期

前章で瞥見した第一次王朝周辺の重要な古墳のうち、天神山古墳については、四世紀後半の半を前後するものという考察を加え、また櫛山古墳については、四世紀末から五世紀初頭に築造されたものとしたのであるが、後者の櫛山古墳は、他にも營造時期推定の要因はあるが、端的には、仁徳天皇陵などで知られる長持形石棺を有することにおいて、その時期を推定したものであり、前者の天神山古墳においては、玉製品などの装身具が皆無でありまた木櫃内の中心であった朱(辰砂)は、魏志倭人伝の「景初二(三)年六月、倭女王遣大夫難升米等詣郡……(略)……。其年十二月、詔書親倭女王曰、制詔親魏倭王卑弥呼……(略)……。又特賜汝紺地句文錦三匹・細班華罽五張・白絹五十四・金八兩・五尺刀二口・銅鏡百枚・真珠・鉛円各五十斤、皆裝封付難升米・牛利……(略)」という記事などによっても知られるごとく、朱の類が、鏡と同よう重要賜品と考えられるものである上、これを取りまくに、鏡二〇面をあてているが、遺骸の埋葬は認められず、陪塚の要素もっている。朱をとりまく二〇面の鏡と、木櫃前後に配された三面の鏡は、方格規矩鏡6、内行花文鏡4、画文帯神獸鏡4、画像鏡2、三角縁神獸鏡2、獸形鏡3、獸帯鏡1、人物鳥獸文鏡1で、そのうち仿製鏡は、日本の文様を意匠した人物鳥

獸鏡をはじめとする三角縁神獸鏡2、獸形鏡2の五面を有しながらも、方格規矩鏡を六面、副葬する点などからである。

この四世紀後半の半ば頃の天神山古墳を陪塚とし、五世紀初頭前後の櫛山古墳との間に営まれた崇神天皇陵の推定時期となると、同陵域内出土という資料が少ない関係で困難であるが、強いて推論すると、濠内から出土した銅板の、表とみられる方の中央に、円形を中心に方形格と線刻した文様が、内行花文鏡と共通性を持ち、また直弧文鏡との関係も考えられることから、優秀な内行花文鏡・直弧文鏡などが仿製され、これを副葬した時期前後の营造であつて、優美な鑄上りの直弧文鏡が副葬された新山古墳³⁸や内行花文鏡が副葬されていた日葉酸媛命陵³⁹などと、その营造時期には大差がないと考えられるのであり、その上、主墳の营造が、陪塚の营造よりも多少古い場合があつても当然であることからして、天神山古墳よりも古くても、長年月の差があるとはいへない。このことは、築造企画の数値が、 $6 \cdot 2 \cdot 12$ の天神山古墳と $6 \cdot 1.5 \cdot 1.5$ の崇神天皇陵と異なるも、後円部の半径の数値よりも少ない比率を示すとともに、後円部の円弧が中軸線と交わる点から、前方形隅角と周濠隅角とを結び、中軸線の方に延長して交わる点までと、その点から前方端までとの比率は異なるもの、おのおの古墳では、同じ長さ（比率）であることを示している点から、大差のない時期の营造という推定は不可能でない。

また、天神山古墳と同じ築造企画の数値を示す景行天皇陵・大墓両古墳においても、その立地は異なる上、副葬品等について判明しない現在、天神山古墳の前後とみるべきであらうと思われ

る。

鳥見山麓の古墳で、最も規模の大きいメスリ山古墳は、その堅穴式石室も長さ八・二尺という大きいものである上、副葬品のみを埋納した堅穴式石室（副室）があり、その副室は、天神山古墳の石室と同じ横断面が合掌形をなすものであるとともに、天神山古墳は、陪塚として築造された墳丘における主石室であるという相異はあるものの、遺骸を埋葬していない石室として、同一視できるものである。また、本来同一墳丘に設けるべきところを、天神山古墳のように、主墳から離れて別に墳丘を設けたということは、埋葬された人の身分関係、すなわち副葬品の多寡、権力の相異ということによるという断定をなせば問題外であるが、その同一墳丘内に設けるよりも後ということも考えられ、したがって、天神山古墳よりも古い時期の营造とも考えられないことはない。

さらに、メスリ山古墳の主室出土品で、特種なものとしてあげられる椅子形石製品は、近くの古墳では、日葉酸媛命陵・新山古墳で出土しているにすぎない。このことは、メスリ山古墳の营造時期推定の有力な資料といえるのではなからうか。

メスリ山古墳の東北方、第一次王朝推定地に最も近い鳥見山麓古墳としてあげられる茶臼山古墳は、メスリ山古墳の主石室よりも、その規模は小さいが、積み上げられた側壁はもちろん、底部の敷石、天井石まで朱を塗抹した優美ともいえる石室で、王者の奥津城とみるに、副葬の玉杖とともに最適ともいえるのであるが方格規矩鏡1、内行花文鏡2・5、画文帯神獸鏡2、三角縁神獸鏡と一応、古い時期の古墳でみられる鏡式は存在するものの、方

格規矩鏡の副葬数は、他の鏡式よりも少なく、またメスリ山古墳の玉杖としてゐるものと、茶臼山古墳の玉杖とは趣を異にするもの、同一種のものをも有し、さらに、石室の前後下部に棚状のものを設けるとともに、一般例として、石室底部が粘土であるに對して敷石であるという点、メスリ山古墳よりも相当廻ると考えることは不可能とみられるのである。

以上のように、柳本・鳥見山麓の主要な古墳の營造時期を推定すると、いずれも四世紀後半から五世紀初頭であつて、それも後半の半ばごろを前後するものといわざるをえないものである。

註

(38) 梅原末治『佐味田及新山古墳の研究』大正一〇年

(39) 梅原末治「古式古墳観」(近畿日本叢書『大和の古文化』)

昭和三五年

(40) 同一墳丘に遺跡を埋葬する石室を二ヶ所以上設けるようになった結果、副室が、主墳から外に出たと、私は解している。

(41) 前註(38)・(39)・梅原末治「椅子の石製製造品一」(大和文化研究六の一) 昭和三六年

三 畿内古墳の初現地域

二章のように、第一次王朝周辺の主要古墳の營造時期を推定すると、古墳出現期のものといふべきものはみあたらず、その上、この周辺の古墳が、突如として出現したと断言できない。しかも、どの付近に出現したのであるか、この問題は、古墳研究上

大和政權成立への一考察(小島)

の一大問題であつて、即答は困難であり、諸先輩もたえず研究を続行されてゐるのであるが、奈良盆地周辺における著名な古墳群、すなわち佐紀・馬見両古墳群においても、前章での推定時期と大差のない營造であり、まして、第二次王朝の古墳營造地域ともいふべき百舌鳥・磐田(道明寺)両古墳群においても、第一次王朝周辺の古墳より古い時期のものは認め難い。すなわち、権力と富を必要とする古墳營造においては、その権力と富を得て、はじめて誇示できるものであるため、大和政權の成立によつて、その権力と富とを獲得し、前方後円墳が誕生し、これが地方の族長に、大和政權支配下の資格として、前方後円墳の築造を認めたとすれば、⁽⁴²⁾前方後円墳の發生は、この第一次王朝周辺の營造時期とすべきであろう。しかし、古墳そのものについては、その前提となるべきものが存在するとみるべきが至当である。特に中国においてもみられない前方後円墳においては、前提となるべき古墳の存在を考へるべきであり、その古墳の形態は、わが国古代文化に大きく影響をあたえた中国・朝鮮でみられる墳丘の形態と考へてしかるべきである。だが、古い時期とみられる古墳に、前方後円墳以外の形態のものがみあたらない現在、前方後円墳の初現的なものが、第一次王朝ともいえる初期大和政權の勢力圏、あるいはその周辺に存在すると考へて、早計であろうか。よつて、つぎに簡単にその近接地の前方後円墳の、初現的なものを考へてみよう。

いうまでもなく、古墳は、いわゆる権力者の墳墓であつて、一般民衆の墳墓でないため、一般民衆の墳墓とも、権力者の墳墓と

も未だ断定されない弥生式墳墓を、直ちに古墳の先行段階としてみるのには、問題を残すのであるが、壺棺以外に判明しなかつた幾内の弥生式墳墓に、木棺直葬という端的な言葉で表現できるような弥生式墳墓が、田能・勝部・瓜生堂などの遺跡で検出され、追つて幾内各地で発見されることとおもふが、その木棺の埋置状態は、現在直ちに古墳文化前期とみられる古墳の内部構造に結びつけられないものの、その木棺の規模と、竪穴式石室あるいは粘土槨で推定される木棺の規模とを考へ合せたとき、竪穴式石室あるいは粘土槨で推定される木棺の長さの短かいものが適るといふ考察も可能となつてくるのであつて、この検討については、稿を新らたにして私見を述べたいと思ふが、現在、丘陵上の自然地形を利用した小規模のものから、丘陵（尾根）端、あるいは台地端縁などの傾斜変換線の自然地形を利用した大規模のものに移る。すなわち、前者の丘陵が古く、後者の傾斜変換線のもの新らしく、また後者に立地していても、前者の立地の要素を有するものが新らしく、その反対に、前者に立地していても、後者の立地の要素を有するものが新らしくとする私見から、この前者の丘陵上の条件に合致するとみられる古墳をあげると、

(1) 摂津国神戸市須磨区板宿町 得能山古墳……この古墳は、小丘陵の一頂部で、宅地造成中、石室が発見され、調査されたものであるため、円墳と推定されているが、後記の万籟山古墳のような墳形であつたかも知れない地形にある。竪穴式石室は、ほぼ南北に主軸をおく、長さ四段前後、幅約〇・九段、高さ約一・八段の底部中央が凹むU字形をなしていたもので、副葬品には、直刀と

鏡が知られているのみである。⁽⁴⁵⁾

(2) 摂津国神戸市兵庫区会下山町 二本松古墳……この古墳も昭和二年浄水池開鑿中の検出で、径二〇段内外、高さ約二段の円墳と推されているが、一独立丘陵の標高八五・九段の頂部に営まれており、万籟山古墳のように前方後円墳であつたかも知れないものである。竪穴式石室は、主軸をほぼ南北に置いた長さ五・八段、底面の幅約〇・八段、高さ約〇・九段で、底部は断面U字形の粘土床とし、石室内全面を鉄丹塗布したものである。副葬品には、鏡、琴柱形変形品、直刀・劍・刀子・斧・鉄鏃・鉄釘・鉄片などが知られている。⁽⁴⁶⁾

(3) 摂津国宝塚市長尾山 万籟山古墳……この古墳は、尾根隆起部を利用して営まれた南面の前方後円墳とみられるもので、山の形に支配され、古墳の界線を定めるのに困難なものであるが、全長約六四段、後円部の径約三六段、高さ約四・五段で、墓石の存在は考えられるが、埴輪の圍繞については、不明確というよりも無いといふべきものである。竪穴式石室は、後円部の中央、主軸に沿つて、南北にあつて、長さ約六・八段、下底部の幅約〇・九段、高さ約一・八段を算し、底部は棺の部分へこましたU字形をなす粘土床である。副葬品のすべては明らかでないが、管玉・瑪瑙玉、鉄片が調査時に検出され、また、この古墳から出土したと伝える鏡などもある。⁽⁴⁷⁾

以上の三基の古墳で、その副葬品と、円墳であるかも知れないといふことに問題を残しているが、一方、整備されない前方後円墳の姿なるものが想定されるのであり、この三基につづく姿の古

墳として、正確に内部構造が判明しない山城国右京区墨原町所在の一本松塚古墳⁽⁴⁶⁾、大和国大和郡山市小泉町所在の大塚古墳⁽⁴⁸⁾などが考えられるのである。

すなわち、前方後円墳の初現的なものとして、淀川右岸の摂津国所在の古墳が考えられるのである。

註

(42) 西嶋定生「古墳と大和政権」(岡山史学一〇)昭和三七年
(43) 弥生式墳墓で多量の鏡や玉類、その他副葬されているものもあり、その副葬品のあるものについては権力者ともいえないことはない。

(44) 尼崎市田能遺跡発掘調査委員会編『田能遺跡概報』・豊中市教育委員会刊『勝部遺跡』・大阪府教育委員会刊『東大
阪市瓜生堂遺跡の調査』各昭和四二年

(45) 梅原末治『兵庫県下に於ける古式古墳の調査』(兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告書二)大正一四年ほか・出土鏡には内行花文鏡・方格規矩鏡(方?)各一面

(46) 梅原末治「会下山二本松古墳」(兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告五)昭和三年・朱を塗抹した桜井茶臼山古墳に琴柱形変形品といえる五輪塔形石製品が出土しており、相
通ずる要素をもっているとみられる。

(47) 梅原末治『近畿地方古墳墓の調査二』(日本古文化研究所報告四)昭和一二年

(48) 梅原末治「川岡村岡ノ古墳」(京都府史蹟勝地調査会報告二)大正九年

大和政権成立への一考察(小島)

(49) 伊達宗泰「小泉狐塚・大塚古墳」(奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告二三)昭和四一年

む す び

以上のように、第一次王朝周辺の古墳から、その营造時期、さらに第一次王朝の勢力圏あるいはその周辺の初現的な姿の古墳を瞥見し、また、はじめにもふれたごとく、雄大な応神天皇陵の营造や、自身の雄大な陵を和泉百舌鳥耳原の地に設けた仁徳天皇の如く、その権力を誇示したとみた場合、第一次王朝成立時期と、その周辺の古墳との関係において問題を残すのではあるが、古墳文化の普及伝播の背景に、大和政権の政治上の優位性が横たわっていたと考えるならば、第一次王朝においても、応神・仁徳天皇陵の如く、その権力を誇示するための雄大な前方後円墳が考えられるのであり、また、この墳墓营造という工事に従事する者は、被支配者であり、保守的な面を多くもつものであるため、その技術や慣習の制約をうけやすいものであることから考え、雄大な前方後円墳の前提となった古墳というべきものが存在することは否定できないことである。

よって、その第一次王朝を成立させた豪族(族長)が、大和へ進出するか、大和の在地豪族と和合するかの問題はあるとしてもその出自地点というべきところか、その経路地というべきところだが、前提となる墳墓の初現地域と考えて妥当ではないかと思われるのである。

はじめにでも瞥見したごとく、継体天皇においては、前王朝の

基盤、大和・河内の大和川流域地帯への進出まで、山背・摂津・河内・大和の分界点付近の淀川流域を中心として、大和・河内の在地豪族と対立し、北九州の生まれとみられる応神天皇の一軍は難波津への上陸までに、摂津の務古水門に入ることから考え、また、当時の大阪湾から淀川流域の地勢を考慮すると、それが西方から、あるいは北陸方面からの進出にあたっては、大阪湾・淀川を渡つての進攻は、一朝一夕のことと考えられないことであり、したがって、淀川右岸の摂津国において兵站を設け、対峙して勢力を誇示した後、進攻か和合を求めたと考えてよいのではないかと思われる。

このような推察を、第一次王朝周辺の古墳よりも古い、初現的な姿を示す摂津国の得能山・二本松・万籟山などの古墳からなしたとき、これらの古墳营造地付近に進出した第一次王朝成立者が兵站地とし、勢力を河内・大和と対峙させ、さらに墳墓をも営み大和への進出を計っていたのではないかという一試案が可能となるのではなからうか。

このように、初現的な古墳から、第一次王朝成立者の進出経路を求める私見は、一笑に付されるべきものであるかも知れないが大和政権成立と古墳の初現との関係を導き出されればと思ひ、不備不十分な資料を使用して一私見を記したもので、頑愚が多く、諸君の叱正があることと思ひ、寛恕をお願いしたい。